

## 上田秋成と河内の唯心尼―再思

鷲 山 樹 心

### はじめに

もうかれこれ二十年もむかしのこと、拙著『秋成文学の思想』（法蔵館・一九七九・一）出版のうちに、「秋成と唯心尼」と題した小論を「付論」の章の一文に加えたことがあった。

最近のことであるが、上田秋成と唯心尼のまじわりの歴史上の舞台となった河内の国日下の里（現在、東大阪市日下町）のあたりを再訪する機会があり、調査にもむいた往時とはかなり様変わりした当地一帯の様子に時の流れを感じながらも、かつ懐しく、これをきっかけにいまいちど「上田秋成と河内の唯心尼」と題した「再思」の一文をまともなおしてみることにした。

一読ご批判・叱正をいただけるならば俸せである。

### 1

寛政九年（一七九三）十二月十五日、上田秋成は、糟糠の妻瑚璉尼五十八歳の急死に合い、あまつさえ両眼―特に左眼の視力の極度の衰えに苦悩しながら、六十四歳の孤独と傷心のさなかであった。

そのような秋成を、明けて寛政十年の五月末に河内日下の地へたつて招いたのは、秋成のかつての友平瀬助道の妻で、助道早逝の後古里の日下に帰って落飾、爾来庵住の尼僧生活をいとなんでいた唯心尼であった。

秋成は、そのおりの日下の里を起点とした見聞を、『山霧記』（やまぎりの記）と題する一書にまとめているが、その冒頭部に、特に唯心尼と自分とのかかわり、

今の唯心尼の日常その他について、

目のいたはり、此夏は世離れ、のどかならん所にとて、河内の国の人のいざなへるにつきて出たつ。

あるじの尼は、廿とせあまりこなた、うらなきかたらひ人にて、たえず問聞ゆるが、身幸ひなく、親・をとこにはやう別れ、四十たらぬほどよりかしらおろして、此庵住に、いみじう行ひするいとまには、ふみよみ手習ふわざをつとめて、昔の世いさ、かもおぼしいづる事なく、いみじきためしにもかぞへつべき人なりけり。(中略)

あるじの有さまをみれば、かたちよりして何くれのしわざの、昔には似つ、もあらず。翁をいたはり給へることのかたじけなさよ。いづれの道にも、ふかう入立し人こそありがたけれと、おぼししめるにぞ机にさぐりよりて、物のはしにかいつく。

なきぞともありともあらず捨てし世の  
後のある身のすゞしかりけり

朝よひの仏のつかへをこたらで  
かやりをかねてくゆるたきもの薫物

うつつのやみのたどりは、鳥の跡いかでみゆべき。

と記している。

秋成は「山霧記」の冒頭、このたびの目下訪問は、「目のいたはり」をこの夏は世離れして閑寂なところだと、この河内の唯心尼のいざないにしたがつて思いたったこと。ついで唯心尼とは、すでに二十年來のまじわりで、その間「たえず問(ひ)聞ゆる」親しさであることに触れ、また、唯心尼の現在の尼としての生きかたを「いみじきためしにも数へつべき人」とも讚え、「後のある身のすゞしかりけり」とも詠嘆している。「後のある身」とは、来世のあることを信じて疑わない唯心尼の日々の姿を指したものであり、その姿をすがすがしいものよと礼讚しているのである。そして、唯心尼の信仰生活が、今ではことさらのものではなく、尼としての日常生活の暮しのなかに、しつくりと溶け合つたすがたを「朝よひの仏のつかへをこたらで、かやりをかねてくゆるたきもの薫物」と、ほおえましく、かつ的確に詠み納めている。そして、このような唯心尼の日常に触れながら、「いづれの道にも深く入立し人こそありがたけれ」と、唯心尼にかかわる評言を集約している。秋成不斷の人となりか

らみて、唯心尼についてのこの場合のさまざまな評言は、当面のあるじに対する儀礼の世辞では決してない。胸裏の思いをそのまゝに吐露したものであったと、私には考えられるのである。

## 2

『山霧記』の巻末には、この一書の「後記」のような形式で、

山霧たちさふるまなこには、人にかゝせつる水茎の跡の、老がぬか齒もる、言は、き、もたがふ覧かし。とまれかうまれ、人の見たまふべきにあらねば。

寛政十年の夏さつきの廿日まりより、ふん月のつごもりがたまでの事を、日なみのさまにかいしるせし也。目をやみて、心さへくらきには、いふことも、たどたどしくてなむ

とある。なお『つゝらふみ』(五)には、『山霧記』のなかに収めた日下の正法寺での「花合せ」の中の一部を、『雨かはず』と改題して再録しているが、その文末には、

右、寛政十年の夏五月廿日まりより、文月のつごもり方までの事を、日なみのさまに、唯心尼に筆かはらせし山霧の記と云中に書出せし也。目おもくやみていたはりすと、河内の日下の里の正法寺と申す御寺にやどりしてありし時のことなり。

とある。右の『雨かはず』文末の添え書によると、秋成の『山霧記』一書は、折から両眼の視力の減退に悩む秋成の折々の口述を、ほかならぬ唯心尼が自ら筆録したものであったことが明らかに示されている。ちなみに『山霧記』の本文のなかには、「唯心尼」という本来の呼称を用いたところはなく、「あるじの尼」あるいは単に「尼」、または「人」などと間接の表現になっているのは、当の唯心尼が筆録者であった事情によるものであるう。

## 3

秋成が自分と唯心尼のかかわりに触れた手記のなかで、亡妻を追慕する自己の心情をそのままに吐露した、和歌四首を含む印象深い『麻知文』まちぶんの、次の一文が目止まる。

平瀬のすけ道のめの、尼になりて、河内の国の故里にいたりて住（む）が、時々ことかよはせるに、難波にくだりし便に、一人とひゆく道のほど、にはかにむら雨の降り来て、いとわびし。

いこま根の雲は嵐に吹落ちて

ふもとの里をこむるあま霧

待ちとりたるものに、あはれなる事共かたりあひつゝ、かたみに袖をしぼりて、日頃とゞまりをる。さぬる秋は、なき人とこゝに來て遊びつるをおほし、いずるにも、いと物うく、なぐさむ事こそなけれ。

かりわびぬ宿は昔の春ながら

身にあき風のしむこゝちして

夢に見え現に去らぬ佛は

かはらぬ宿にあればなりけり

身は同じ家にありとも物思ふ

心はいづちやどりかへてん

そのころ、両眼の視力の急激なおとろえに苦惱しはし

めた初老の秋成にとつて、妻瑚璉尼の突然の死は、筆舌につくし難い痛恨のきわみであった。その深い悲愁を胸に、昨秋のころのこと、今は居ない妻とともにおとずれた日下の唯心尼の庵に、秋成はいま一人向かう。道中俄に襲う村雨にけむる日下の里の眺めを詠じた「いこま根」の一首は、そのおりの暗たんとした秋成自身の心情をよく伝えるものがある。

秋成のおとずれを待ちとるようを迎え入れる唯心尼は、秋成と共に、いまは亡き瑚璉尼を偲びながら「かたみに袖を絞」つたとある。こうしてなぐさめあい、いたわりあいながら唯心尼の庵に日ごろをおくるありさまが、添えられた亡き妻を偲ぶ哀傷の歌三首の詠を軸に、しみじみとした哀感を誘う一文を形成しているように思われる。

ところで『麻知文』に記録を残す右の秋成の日下訪問の時期は、瑚璉尼が世を去つた翌年の寛政十年晩春の頃であり、それは『山霧記』によつて知られる秋成の河内日下長期滞在以前の事実であった。そして、その時、秋成は唯心尼から、目のいたわりを兼ねた当地への転地静養のことを、強くうながされた。亡き妻瑚璉尼を思い偲び、身も心も憔悴のどん底にある秋成に応接しながら、その時思い定めた唯心尼の胸ひとつの決断であった、と

私には思われるのである。

4

先にみた「山霧記」冒頭の文にあるように、秋成は唯心尼と自分のかわりについて、「甘とせあまりこなた、うらなきかたらひ人にして、たえず問聞ゆる」間柄であることを述べている。事実この二人があい知るようになったのは、平瀬助道在世のころからであった。

若いころの秋成と助道は、それぞれの親のすすめで、名だたる難波の学問所懷徳堂に通い、成人の後もこの二人の交遊は尽きなかった。二人して京の嵯峨野の三秀院その他を逍遙するなど、そのありさまは秋成の『鶉の屋』の記述によって伺うことができる。

『麻知文』のなかに、

平瀬の児達を、めのとらかしづきて、野に出けるに、  
雨の降りければ、やどりに立よられしに、母親自の  
許にいひやる

春の、に遊びそめぬるひな鳥の  
つばさしほれて小雨そぼふる

とあるが、これはまだ唯心尼在俗のころ、つまり、その夫助道在世のころの秋成と唯心尼の交渉の事実を伝えた稀少の詞書並びに一首である。

そのころ、助道夫妻の間には「平瀬の児達を、めのとらかしづきて」とあるから、複数の幼児がもうけられていたと思われる。ある春の一日、めのとらに幼な子らの手をとらせ、野に遊ぶゆとりは、その当時の助道一家の日常生活のゆたかさを想像させるものがある。

しかしながら、その助道一家の倅せは、実は、当の助道の早逝によって一挙に暗転の憂き目を見る結果となる。このことも『麻知文』のなかに、一部断章ながら、その事実を物語る秋成の和歌一首を含む次の一文の存在によって伺い知られる。

(前欠) この父の助道は、よろづをおのがま、にありしが、四そぢ足らぬほどより、あつき病(に)ふしてあるほどに、思ひ懸けぬにはあらねど、  
我こそと思ひさだめて捨てし世の  
人におくれんものとしらずて

秋成は右のように数少ない竹馬の友助道の早逝をいた

む挽歌一首をその靈前に捧げている。「山霧記」冒頭に言う「あるじの尼は、……身幸ひなく、親・をとこにはやう別れ、四十たらぬほどより、かしらおろして……」とあることの内幕が、また改めて裏付けされるだろう。

## 5

助道の没後、古里の河内日下に帰って尼僧生活に入った唯心尼の庵を、秋成は幾たびか訪問している。

唯心尼は、夫助道と死別後、期するところあつて仏の道に帰依したが、そのかたわら、「文読み」「手習ふ」わざにも積極性を發揮する性格の持ち主でもあつた。そして、たまたま夫助道とのよしみで知る人となつた秋成は、その当時すでに文人学者として名をなす人であり、自分にとつては最も身近に接することを許されるその道の先達としての人となつたことは想像にかたくはなからう。ここで、秋成と出家後の唯心尼の交流の事実を伺わせる若干の資料に触れてみるならば、先ず『麻知文』の記事のなかに、

難波に、くすしの許に、扶けられてゆくたよりに、

又、河内にとひきて、日比在(る)ほどに、「田

う、るわざいかな覽、昔の人にならひて、雨を乞ふ  
哥よみたまへ」と云。あなしれぐし(以下欠文)

とあるのは、年次不詳ではあるが、ある年の日でり続きの田植のころであつたと思われる。秋成が京の地から「難波にくすしの許に扶けられて」下つたというのは眼疾の治療のためであり、その頃は妻の瑚璉尼はまだ健在であつたように思われる。秋成は難波下向のおりに日下に立ち寄り、そこで雨乞いの和歌をと所望されている。

折からのひでりに、秋成に雨ごいの和歌を所望した人は誰であつたか。右の残欠文からはわからない。が、それはおそらく唯心尼その人であつたであろう。『つづら文』(六)に収められた「紅葉」の文に、

河内の国くさかの唯心尼が住む軒の木立に、あるじ  
にかはりていへるは、しひたる求めの、ありがたけ  
ればなり。

と見え、また『十雨余言』に、

唯心尼のいほりに、たび寝してありしほど、あるじ

の尼が筆とりて、いはせしなり。

とあるなど、唯心尼は秋成のおとずれのたびごとに、師の彼に和歌や詞文の執筆を乞い、秋成はその折りごとにごく自然にそれらの求めに応じていた事実を知ることができる。

また、『余斎文集』に収まる「古戦場」なる一文の起筆部分に、

かうちの国の唯心尼、なにはなるやどりにとむらひきて、ひと夜かたりなくさむるほどに、「れいの手ならひにせん物、いひきかせ給はばや」となん……

とある。

秋成と唯心尼のまじわりのなかで、その出あい場所が、資料上唯一難波の秋成の宿りとある点、興味深いものがあるが、その時期はいつの頃であったのか、残念ながら特定し難い。それはまだ秋成夫婦が在阪のころのことであったのか、それとも秋成一時下阪のおりのことでもあったのか、明らかにする条件も見出し難い。ただ、出家後の唯心尼と秋成の出あいの場所といえれば特に目下

の里のみではなかったことを示す稀少の一文として、右の随筆「古戦場」の存在は、本論にとって資料上一定の意義あるものと考えられる。

## 6

秋成は、享和三年春のころにまとめた歌集『十雨余言六十章』一巻の末尾に、付記のような形で、寛政十年夏の頃の『山霧記』述作当時をなつかしみ、次のような内容の一文を書きとどめている。

五とせのむかし、目のいたはりすと、かふちのくさかの郷の、唯心尼のいほりにたび寝してありしほど、あるじの尻が筆とりていはせし也。ただ三時ばかりに、文二くだり、哥六十首を、つぶつぶと打出（せ）しには、いたうこゝろみだれしかば、うちつゝかず、腰折（れ）はなれて、文も哥もきたなげにこそあれ。

あるじのいもうとに琴かきならさせ、わがむすめの尼、かゆきよきほどにすゝむる。こゝろにやかなひたる。若駒のあゆみして、とく成（り）ぬ。

そのとき、秋成のかたわらに侍して筆を執る唯心尼。文二くんだり和歌六十首を胸中に思い案じては、つぶつと口ずさむ秋成。折から唯心尼の妹に当たる人もその場にあつて、なくさめに琴一曲をつまびき、また、秋成が京よりかいぞえに連れて下つた養女の尼は、ほどよい粥を煮てすゝめるなど、秋成は唯心尼の草庵で体験した、今ではもう五年も前のある夏の日の、いかにもなごやかな風雅のひとつきの流れを偲ばせる一文を書き添えている。

ところで、『山霧記』の記述にかえつて読みあらためてみると、寛政十年六月十四日、折から当地の石切神社夏の祭りの当日のこと、唯心尼は秋成の外出中に、折からの暑気あたりで腹痛をわずらつて病臥していたことが記されている。帰庵した秋成は、突嗟のできごとにもこれも日ごろ病弱の養女の尼となすすべを知らず、ただ慰まげくよりほかはなく、眠れぬまゝ、に夜を過すが、翌朝、日下の正法寺より急使があり、秋成親子は、後に心を残しながら、その寺の衆寮に引き移ることになる。

五月以来、今までの間、遠来のまろうどである秋成父子の生活その他一切の世話めんどろを、結果的には総て唯心尼一人にゆだねたことへの反省が、唯心尼とは法縁

に連なる正法寺住持をはじめ同族の人びとの、この場合の配慮につながつた、と私には考えられる。

唯心尼の容態は、さいわい数日後には、正法寺に秋成を訪ねるまでに回復を見たようである。

## 7

『山霧記』のなかに、秋成が唯心尼の庵から正法寺に移り住んだ後の話として、「みな月晦日つみりがた、むら雨に一日ふた日降り過ごして、秋の初風すゞしきあした」のこと。止宿中の秋成をしたう日下郷の風流の土数名が、住持祖盈の発案でつどい寄り、折にあさわしい「花合せ」の宴を催したことが記録されている。

その日は、正法寺の庭に用意された数器の花がめに、菊・萩・おみなえし・桔梗その他の、秋を彩る花ばなを飾り、つどう人びとがそれぞれの花の容姿の優劣を、即興の和歌に託して競いあう。宴の始めから用意の酒盃をかたむけながらの心よい時の流れで、このくだりの記述には、その場の主賓に名ざされた秋成の、いかにも雄弁な「花の論」の展開を読むことができて楽しいものがある。

ところで、そのおりの記録にとどめた人びとの花のう

たのなかに、実は同席していた唯心尼が、「紫蓮」という雅号で詠んだ花の歌二首、

菊

山ぶみの家路のつとに折りてこし  
香をなつかしみ白菊の花

吉更

秋ちかう成もゆくかな故さとの  
野らにと宿は住みはそめねど

の詠み歌がある。そして、この「吉更」の歌について「翁もよむ」とした秋成の、

をみなへし

むらさめの後のあしたの女郎花  
誰に別れの露のなみだぞ

の歌一首が記録されている。

先ず唯心尼（紫蓮）による「菊」の歌は、山踏みの道すがら、野に咲く白菊の花の香をなつかしみ、少し折って家路のつとにした、というもので、「菊」を主題にと

りわけ清楚な野育ちの白菊の花にしめす唯心尼の詩情のただよいを感じる一首である。

ところでこの歌に続けて詠んだ「吉更」の一首には、一読して歌人「紫蓮」としての才のひらめきを直感させるなものがある。もつともこの一首の修辞上の本歌としては、「古今集」に見る友則の「きちかうの花」の一首で、

秋ちかう野はなりにけり白露の

おける草葉も色かはりゆく

に求めたものであろう。が、それにしても、上二句のなかに、本歌にたくまれた「きちかう」の花の名の読み込みに合わせて、さりげなく「秋ちかう成もゆくかな」と、師秋成の二文字を折り込んだ手かずには、尋常ならぬ才知を示すものがある。また、そのような修辞上の技巧とは別に、「秋近う成りもゆくかな」と詠む上の句に示す詠嘆の情調は、「故さとの」野らにと宿はすみはそめねど……」という下の句にただよう孤独感とひびきあって、おりから秋の到来と共に身近なものとなる師秋成の一旦の帰京への寂寥感をただよわせるものがある。

秋成は唯心尼の「きちかう」の詠に秘められた心情をすばやく察して、「翁もよむ」と唱和する。「をみなへし」の一首は「むらさめの後のあしたの女郎花」の姿をそのままに擬人化して、素直に「誰に別れの露のなみだぞ」と詠みきっている。

このように、唯心尼（紫蓮）の「吉更」の詠といい、秋成の「をみなへし」の詠といい、表面はたまたま「花合せ」の即興歌として詠まれたものではあるが、そこには期せずして交流する離別の情調のただよいを、ほのかに感じさせるものがある。

8

寛政十年も文月に入り、秋の深まりとともに、秋成の帰京の時期を現実には控えたころ、今は養女の尼とともに正法寺の衆寮に止宿する秋成のもとを、唯心尼は一人訪ねている。「山霧記」とは別に綴った『花虫合』一篇の冒頭部分に、

岡の松風吹きおちて、やどりの前裁の露おき乱る、  
あした、例の尼とむらひ来りて、「今日も長居の浦  
遊びしてかへんなん」と、尚いざよひおはせり。ぞ

うの人の家もこゝにあれば、月傾くまでとゞむ。  
「歌よみて聞せ給はんには」と。「いとめづらかならぬ事も、もとめのまゝに」といへば、はやも筆執りて畏みをる。

八日の月、はなやかにさし入りたり。垣の内外の草村に、すだく虫の声々なるこのおりこそ、前裁のくさぐさ合はせてん。花を左に、虫を右に、くらぶの山路たずたずしくとも、昔の源太夫がみやびには做はずとも、とて、つぶぐと云出たる。まことの色音には、いかでしも。

七番第一

左 はぎが花  
右 日ぐらし

あそか風秋は色にぞ吹きこゆる  
ゆき、の岡の萩の花見に

身の秋を思ひくらしの森蔭に  
慰みかねて音をや入れぬる

風の色に吹く、といふ詞、おく露の浅からず聞ゆ。

右の、おのれ慰みかねては、なきやむか、といふ。是は寂しく、彼は花々し。心うら、うへにて、「侍」とや人もさはし給はん」といえば、尼うなづく。(以下略)

秋成を正法寺の衆寮に訪ねたその日の唯心尼は、「今日も長居の浦遊びしてかへんなん」など「尚いざよひおはせり」とあるように、その日は秋成のもとをすぐには辞し兼ねる風情であった。そのおりの唯心尼の胸中には、なんとなく内に秘めた情感の漂いがあったようである。その雰囲気をいち早く察知した秋成は、この寺内には唯心尼の同族の家もあることであるから、と意を決し、「月傾く」まで唯心尼を引きとどめることに一決する。

文月八日の月光が、衆寮のうちにもさやかにさし入り、折から前裁の草むらにすだく虫の音や、月明の庭に咲きかおる秋の花ばなをめでながら、秋成はおりにふさわしい「花虫合せ」の風雅な遊びのなかへ唯心尼の心をいざなうて行く。

先に秋成は唯心尼からいつものように「歌よみて聞かせ給はんには」と所望されたとき、快く、「いとめづらかならぬことも、求めのまゝに」と応じている。唯心尼

は早速「筆執りて」身をたゞし耳かたむける。そのような寸描のなかに、いかにも親密な二人の応接のありさまを思いうかがわせるものがある。秋成の、和歌の世界へのいざないは、やがて秋の夜長にふさわしい「花虫合」の世界へとひろがりを見せはじめた。

正法寺衆寮におけるこの月明の一夜の、秋成と唯心尼二人の「花虫合」の一文を読み終わってみると、秋成の立場から綴られたその折おりの心情の起伏のなかに、秋の深まりとともにやがては現実となる離別の感傷のほのかなただよいを感じるの、や、主観に過ぎるであろうか。

## 9 むすびにかえて一

唯心尼は、父を河内の国日下善根寺郷の豪族足立方行まよゆきとし、母を文人として名をなす「生駒山人」こと森文雄の弟桃庵の娘とし、この二人の長女として生をうけた人であった。縁有って難波の豪商平頼家の嫡男助道に嫁したが、早くして死別の憂き目を見、四十足らずで尼をこころざし、故里の目下に戻って庵を結び、仏道にいそしみながら、文雅のみちへの志向も忘れないなど、閑寂かつ風雅な日常に明け暮れていた。この唯心尼の素質は、

あるいは、文人肌の母方の血をうけた所為であろうかと思われる。そして、この唯心尼と秋成の文雅の道を縁とした永年にわたるまじわりの経緯については、先章までに大要触れたとおりである。

寛政九年末十五日、秋成は京にあって、妻瑚璉尼の急死に逢い、そのうえ両眼の視力の急激なおとろえに苦しむなど、重なり合う悲運のさなかにあった。

明くる寛政十年の晩春のころ。おそらく眼疾治療のための難波下りの折りであったと思われるが、折からの驟雨に濡れてただ一人おとずれた秋成の、亡き妻を偲んで極度に悲嘆に沈む姿に接して、強く心を痛めた唯心尼は、秋成に対し、ここ日下への、目のいたわりをかねた転地静養を真剣にうながす。既に明らかにしてきたように、『山霧記』の一卷は、その日下長期滞在の折の秋成の随想を唯心尼が筆録したものであった。時に秋成は六十五歳、そして唯心尼は四十二歳であった。

妻瑚璉尼に先立たれた後の秋成は、数次の難波下阪のほかは、最晩年までの暮らしの大部分を京都に求め、みづから「鶉居」（うづらのや）と名づけるように、転々居を移し、実生活のうえでは不自由かつ孤独の歲月を積み重ねていた。しかしながら、秋成本来の学問・文芸の道

の追求はよどみを知らず、執念にも似て片時も忘れるおりはなかった。

最晩年の随想録『胆大小心録』の一節に、

尼が頓死の後には、目が見えぬやら何じややら、不幸づくしの世を、また一年余くらしして、羽倉といふくらうどの所に、ちよとこしかけたは、ついしぬであらうの覚悟であったが、しなれぬ故、又、南ぜん寺の昔の庵のあった所へ小庵をたてて、七十三さいの春うつり申した。大阪から金五十両で上つたが、ことして十六年、なんでやらくらした。（中略）

麦くたり、やき米の湯のんだりして、をしからぬ命は生きた事じやが、書林がたのむ事して、十両・十五兩の礼をとって、十二・三年は過したが、もう何もできぬゆえ、煎茶のんで、死をさわめている事じや。

とある。そのような京なる晩年の秋成を、河内の唯心尼は、なにかにつけて心につけて、秋成もまた唯心尼を文読みの道の愛弟子として忘れることはなかったようである。

「つづらぶみ」(二)のなかに、

河内の尼、足袋ぬいておくりしに

秋成

浅沓の あさましきまで老ぬれば

このたびを世の限りとぞ思ふ

かへし

唯心尼

あさぐつの 浅くは君を頼まねば

などこのたびや限りなるべき

とあるのが目にとまる。

今は京なる老境の秋成と、彼を変わず慕い見守る河内の唯心尼の心の通いが、ほのぼのとただよう相聞の歌の調べである。

上田秋成は、文化六年（一八〇九）六月二十七日、京の地で満七十六歳の全生涯を終えた。その時、河内の唯心尼は五十三歳。そして、それから約十八年後の文政十一年（一八二七）三月二十八日、満七十一歳を一期に唯心尼は遷化した。

△ △ △ △

現在、唯心尼の墓地は、東大阪市日下町南の大竜寺と

いう禅院のほど近くの墓苑の南限にある。この墓苑そのものは大竜寺領か足立家の専有墓地か、資料的な根拠は明確ではないと仄聞するが、それはひと先ずそうとしてここには、唯心尼の父足立方行の墓碑に並んで西向きに建つ石碑の正面には、『紫蓮尼之墓』と大きく刻まれており、その碑背には、

蓮尼者 方行足立氏之長女也 嫁于浪花平瀬氏 終焉於日下村 年七十一 于時文政十年丁亥三月廿八日 葬于大竜寺地中 先塋之次

と記されている。

現在管見に入る足立家の系図には、残念ながら唯心尼の父足立方行の代までを系統的に伝えたものがない。したがって、唯心尼の足立家時代の呼び名は何であったかなどを知るよしもない。

「唯心」という出家後の正式の法名を用いず、「紫蓮」という雅号を墓標名に用いている事実から、此の石碑そのものは、後のある時期に改めて建てられた所謂顕彰墓碑であろうと、私には思われる。

墓石の右側面に、一見男文字と思われる筆致で、

住みはてぬ世とはしるく墨染の  
立わかる、ぞ更になしき

の和歌一首が刻み込まれている。この一首を歌人紫蓮の  
辞世歌と解するむきもあるが、今そのことを証明する資  
料的根拠はどこにもない。あるいはこの一首は、唯心尼  
が自身の生涯の中で、忘れ難い人の世の「えしじょうり会者常離」  
の自己経験を率直に吐露したいわゆる自照の歌であつた  
と思われなくもない。

以上、上田秋成と河内の唯心尼の、文雅の道の学びを  
媒体とした奇しき人間交流の軌跡をあらためて再思して  
みた。

おおかたのご批判と叱正を待ちたいと思う。

### 〔註〕

- ① 本稿に用いた上田秋成の『山霧記』『つらぶみ』『麻知  
文』『十雨余言』『十雨余言六十章後記』『余齋文集』は、  
『上田秋成全集』（中央公論社刊）第九・十・十一・十二  
巻所収本文に、『花虫合』は事情により『秋成遺文』（国書  
刊行会）所収本文に、『胆大小心録』は『上田秋成集』（岩  
波書店刊『日本古典文学大系』）所収本文に依った。

- ② 日下の唯心尼庵の跡地は不明。秋成は『山霧記』の中に、

「いほりのた、ずまひ、木立茂くさしおほひたれば、あし  
たより日ぐらしの声かしがまし、蚊といふあぶれもの、  
うたてむらがるを、むかし田舎住して、かゝるをもならひ  
たれば、あなたもおぼしたらずなん。あたりの家どもとも  
し火はかかけならぬ声のやに、夏は蚊やりの影ぞかゝよ  
ふ。」とあつて、庵周辺の模様が想像される。

- ③ 日下正法寺。秋成は『山霧記』の中に、唯心尼の庵から  
移り住むことになった正法寺について、「とある岡の上  
にさ、げなして、松むら、たかむらおひ繁れる中に、いと  
よらに造られたり。衆寮の方静なればこゝにときこゆ。夏  
はいづちにかあらむ。松のした風吹とほりて、袂寒しとも  
云べきやどり也。」と述べている。

秋成が止宿した寛政十年前後のころの正法寺は禪宗に属  
し、現在知られる当寺の寺跡調査によれば、境内地およそ  
三千坪の敷地に、本堂・庫裏・方丈・上蔵・下蔵・衆寮・  
納屋・鐘楼・梵鐘・表門・裏門・鎮守天神社ならびに御供  
田などで整備されていた、という。ただしその正法寺も明  
治に入って神仏分離の政策によつて境内の鎮守天神社の強  
制撤去、更に全体廃寺の運命をたどつた。

しかし、この土地は、上田秋成という日本近世史上に著  
明な足跡を残す文人学者の長期隠棲の跡であることを重視。  
昭和三十五年（一九六〇）一月二十二日、当時の平岡市教  
委は、当市文化財に指定。爾来東大阪市教育行政管理下に  
継承されている。

（花園大学名誉教授）